

激しくはないが、背骨の芯まで冷たくなるような雨の降る二月の晩だった。昼過ぎから降りだし、いつ雪にかわってもおかしくはないという予報に、六本木からは人けが消えていた。

「笑っちゃいますよね。たった五センチの雪でお手あげの首都なんて、世界中でも東京くらいのものじゃないですか」

カウンターの内側でグラスを磨く沢井がいった。バーに、私以外の客はいない。

「もし三十センチも積もった日には、きっと大地震なみの被害がでますよ。そんなことが一回くらいあってもおもしろいのじゃないかと思っちゃまうんですけど、不謹慎すかね」

北国生まれの沢井は、雪が降ると、東京と東京人に対して優越感を感じるらしい。特に雪道で転ぶ人間を馬鹿にしている。

「そう思っている人間は、お前さんだけじゃないさ。この街がぶつ潰れるところを見たいと願っている、この街の人間もけっこう多いだろう」

薄い水割りをすすりながら私は答えた。

「それって『愛憎相半ばする』感情って奴ですか」

「別に東京に限らないだろうが、嫌いなくせに、でていったら暮らしていけないような人間が、この街にはたくさんいる。お前さんや俺もそうだ」

沢井はわざとらしくため息を吐いた。

「早く引退したいっすよね」

そのときドアが開き、白髪で長身の白人が入ってきた。沢井のため息が笑顔にかわった。その白人が私を見つめ、数秒後に、

「ジョーカー？」

と訊ねたからだだった。依頼人ならば、沢井の懐ろにも、着手金の半分が入る。それだけ引退に近づくというわけだ。

私は無言で頷き、白人を見つめた。六十代のどこかだろう。アメリカ人ではない。贅肉が少なく、背ずじがのびている。そしてどこか見覚えがあった。

「——ジエフアーンソン？」

私は訊ねた。男の口もとに小さな笑みが浮かび、クイーンズイングリッシュで答えた。

「懐しい名だ。しばらくぶりに聞いた」

そして私の隣に腰をおろした。沢井を見ている。日本語だった。

「スカッチウイスキーを下さい。氷も水もなしで」  
沢井は仕事にとりかかった。私は英語でつぶやいた。

「二十年、いやもつとたったな」

男は頷き、灰色のカシミヤのコートの内側から葉巻をとりだした。コートは年代物で、すりきれた袖口そでぐちにかがった跡があった。

「日本は寒いな。引退してからこっち、ずっと暖かいところにいたんでこたえる」

「いつ引退した？」

「もちろん九一年だ。クリュチコフにはもう、私の身を守るなどできなかつた。あれ以来、ロシアには帰っていない。彼らはそれなりの報酬を払ってくれた。つましい暮らしなら、人生の残りを楽しむこともできる。だが約束は約束だ。君に一杯奢もてるために、東京にきた」

「律儀だな」

私は笑った。

「君も律儀だつた。かわつたかね、君は？」

男は沢井のさしだしたグラスを手にし、訊ねた。

「それほどかわつてない。引退を考える機会が多くなつた」

「この人に同じものを」

男はまた日本語で沢井にいった。そしてなにげなく英語で私に訊ねた。

「彼は英語を理解できるのかね」

「それなりに」

私は頷いた。土地柄、ということもある。

「そうか」

男はいつて、英語で沢井に告げた。

「あなたも一杯どうぞ。我々はこれから思い出に乾杯する」

「思い出？」

沢井が私と男の顔を見比べた。

「そう、金髪ブロンドのパメラに。世界は予言のまま、進んでいる」

男はいい、私の記憶がよみがえつた。

ブロンドのパメラ。それは、私の初仕事だつた。「ジョーカー」の名を襲名し、最初にうけたのが、「ブロンドのパメラ」を捜しだしてほしい、という依頼だつたのだ。

## 2

そのバーをやっていたのは、林リンという日中混血の男だつた。無口で、客から話しかけられても、

「はい」と「いいえ」それに「さようでございます」という以外は、ほとんど言葉の口にしなければ。店は、当時は材木町（せいもくちょう）という名の方が通りのいい、六本木の西麻布寄りにあった。

一九八二年二月の寒い日だった。数日前に、東京ではたてつづけに大きな事件が起きていた。まず赤坂にあった「一流ホテル」で火災が発生し、三十人以上が焼死した。その翌日、羽田に着陸寸前の旅客機が墜落し、二十人以上が死亡した。

六本木の上空を、ヘリコプターがひっきりなしに飛びかっていた。ホテルの火災現場を空撮するのが目的だった。

バーが開店するのは午後六時で、先代から仕事をひきついでばかりの私は、六時十五分には、カウンターの端にかけていた。その日最初の水割りを林に注文し、それがでてくるより早く、長身の白人が姿を現わした。

扉を押し開き入ってきた白人は、店内を見回すと、林に訊ねた。

「ジョーカーというお客さんはきますか」

たどたどしい日本語だった。林は無言で私を見た。

「私だ」

私は英語で答えた。白人は、不審の念を顔に浮かべた。

「私の知っているジョーカーは、もっと高齢だ」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。